荒川流域ネットワーク
荒川流域一斉水質調査 2005

水質調査の対象となるパラメータ

・COD(化学的酸素消費量)
水中の酸化されやすい物質(主として有機物)の酸化により消費される酸素量を表す。CODの数値は、水中の有機物の量の目安となり、この数値が大きいほど水の汚れがひどいことになる。河川中の有機物は、流下に伴い増加しながら微生分解を受けるので、CODは途中からの汚水の混入がないと一般に減少する。河川汚濁の程度を調べるのによく用いられる指標である。
ｷﾛﾏｲｸﾛｸﾞﾗﾑは1ppm、ｷﾛｸﾞﾗﾑは3ppm以下、ｺﾏ･ﾌｧｲﾌﾞは5ppmでもすべてあるといわれる。

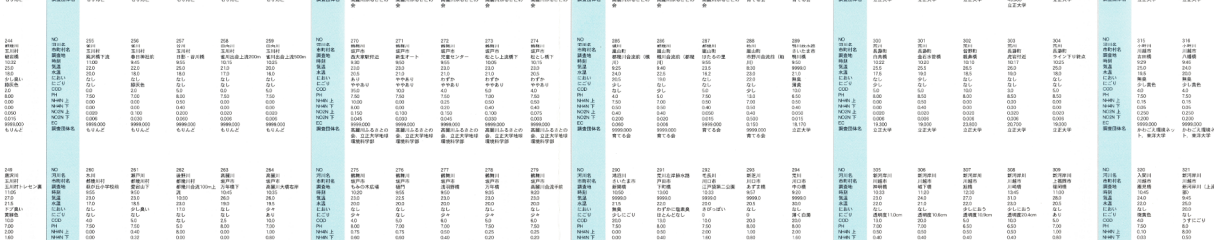
・pH(水素イオン濃度)
水の酸性の程度・アルカリ性を示す。プランクトンの活動が激しい湖沼や、水温の多いところでは、光合成により、水中の二酸化炭素が植物にとりこまれ、pHは上昇する。夏の天気の良い日中に、9.0くまで上昇することがある。PHが中性で7.0くらいになる。アユがみられる小さくなると酸性、「環境基準」で水道1～3類は、PH6.5～8.5以下となっている。

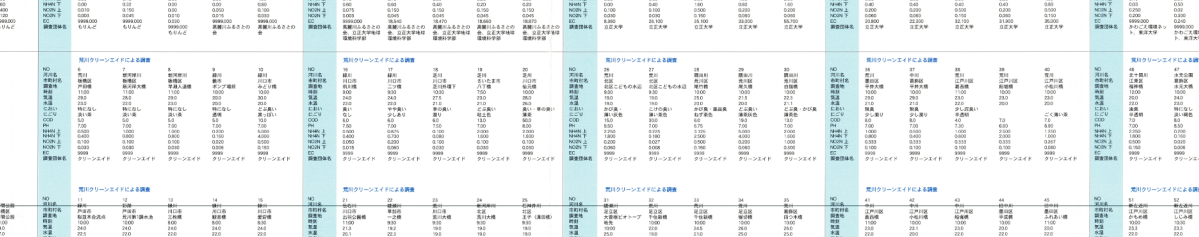
・NH4-N(アンモニア態窒素)
タンパク質など有機物の分解や、亜硝酸イオン(NH2-)の還元によりできる。したがって、有機物が多く、溶存酸素の少ない汚れた水に多く存在する。し尿や家庭雑排水の汚れをみるのに適している。

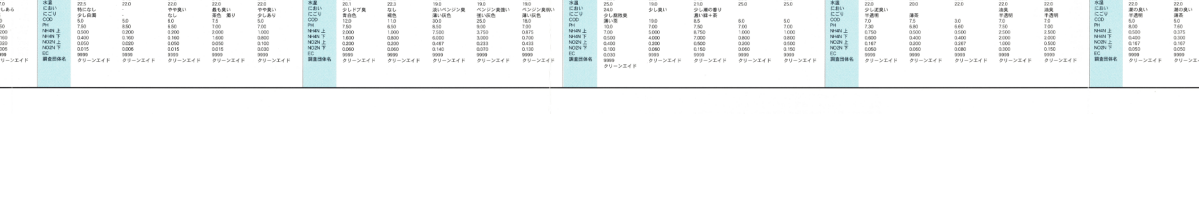
・NO2-N(亜硝酸態窒素)
有機物の多い汚れた水に含まれる、水の汚れの指標として有効だが、水の状態(溶存酸素濃度)により変化しやすいという欠点がある。酸素の状態などに含まれる窒素は、水の中で分解されてアンモニア態窒素になり、さらに酸化されて亜硝酸窒素→硝酸態窒素になる。これらを総して窒素化合物という。

・EC(電気伝導度)
単位はマイクロジーメンス(μS/cm)。水中の無機イオンの総量を示す。無機イオンの多い水は汚れた水とされる。電気を伝える物質が溶けた状態である。海水は高く、純粋は低い。

・界面活性剤(陰イオン)
水道法の基準値では、0.2mm(陰イオン系)。近年、洗剤メーカーは、非イオン系のシャンプー洗剤に切り替えてきている。(市場の約4割は非イオン系)。今年度はユニメーターで測定。







制　作：特定非営利活動法人荒川流域ネットワーク／立正大学地球環境科学部
調査結果データ提供：特定非営利活動法人荒川クリーンエイド